

小林恭子の ロンドン発 グローバル随想

第44回

希望を語る政治家



イラスト・題字：長峯亜里

バーナム・フィーバー、拡大中！

「今この時から、英国が再び自らを信じられるようにしよう。希望を取り戻していこう」

7月20日、首相官邸前でアンディ・バーナム新首相(56)はそう呼びかけた。「希望」という言葉から、新しい政治が始まるという予感と、国民と共に未来をつくっていこうというメッセージが伝わってきた。

今、英国には「バーナム・フィーバー」が広がっている。

バーナム氏は、イングランド北西部グレーター・マンチェスターの元市長だ。今年6月の下院補欠選挙で圧勝すると、1カ月もたたないうちに

与党・労働党党首に無投票で選ばれ、その数日後には首相に就任した。下院初登院の日には、労働党議員たちが次々とセルフィー撮影を求め、「まるでお祭り騒ぎだった」と報じられた。

コロナ禍で存在感、高める

筆者が初めてバーナム氏を見たのは2009年ごろだった。ある市民団体の活動で下院の集会に参加した際、当時文化相だった彼があいさつした。その発言内容はほとんど記憶にない。

強く印象に残ったのは、その後のコロナ禍だった。産業革命を支えた北部は、炭鉱や工場の閉鎖を経て、ロンドンや南部との格差に長く苦しんできた。こうした「南北格差」を背景に、バーナム氏は政府とたびたび衝突する。2020年10月、マンチェスターへの厳しい行動制限をめぐっても、政府が示した6千万ポンド(現在の価値で約131億円)の補償では足りないとして、9千万ポンド(約196億円)が必要だと主張した。交渉は決裂し、政府は規制を強行したが、このとき「北部のためにロンドン政府と最後まで渡り合う政治家」という印象を、多くの人々に残した。バーナム氏が全国的に注目されるのはこの頃からだ。「北の帝王」というニックネームが付き、「次の党首か？」そんな憶測が広がり始める。

